繪本直指寶

畫師浪速橋守國

直指寶

浪華書舗 稱觥堂版

直指寶叙

畫本直指寶叙

畫道蓋難言也難言者傳神寫照是而已矣夫高雅清達之情趣林泉烟霞之高致結日送所在而含毫命素聚精神於兩一會天

真於幽澹自然表外之生氣物與心手相湊神之又神而一塵不入者畫家所謂生動之靈耶如幟染屏間孫郎擘手水鳴牀上唐帝心驚則三寸不律管

上寓天機之玄化忽兮不可知焉汔兮不可測焉所謂造化在手者信不妄可謂傳神寫照之妙點入之頭之微之丹青三昧盡矣郭若虛深賤衆工雖曰

畫而非画者蓋能傳其
形而不能傳其神也倘神
寫照乎難哉余往歲圖寫
寶袋及通窔志傳于世頃
揉鼠蟬之巢彙平日之稿
繕寫為十卷名曰畫本直

指寶和也漢也于物于事
任意收圖焉想雖經過上
心矣雖寄樂情景矣去來
無認但圖而可傳者夫惟
画乎直指窔者余一家之
弥也耳觀人勿為猫兒類

大一虫之譏上於是乎叙

延享元歳甲子十一月

後素軒橘守國

和漢畫家傳説

畫に和漢乃別あり而倩流派を知る者学ぶ所乃傳来乃ち一家の骨法を傳へるにより古昔本朝より畫圖の名人多し中にも百濟河成巨勢金岡藤原信実土佐氏の祖先皆本朝の名を揚し大和絵の達人なり細ふに後小松院嘉永年中異国より如雪乱芳軒といふ者来朝して渓西を畫き名称尚叶て播州狩野正信といふ人其門に入て如雪を師とし学べり又周文といふ唐僧漢畫を能と雪舟彼を師として畫法を習ふ此時正信も日々に周文に教を受そり雪舟正信日学そる所もつぱら人乃筆勢周文に髣髴なるを又茲小茂原信実の末裔小土佐

光信といふ人あり天性和朝の繪を工み遠祖信實にも恥ぢ大和絵は第一と称せ正信が宗子え信光信が女孫娶て婚姻なせ結び且光信ふ大和絵の畫法を受うゝ世間法國乱まて戦闘たゆく打ぢき世間ねゞろうるに え信も雅を紀列ふ徠あるい泉列和列ふ身を忘て先て太平ぬ時を待り雪舟い縞茶にてり蓋屋に寓居して答の絵を書て絵食に後大明國ふ渡て張有敬と師とす畫乃茶碗ぬ日本に帰る本朝草畫ぬ始なり是より狩野い茶ハ皆真ふして茶をしあれを唐絵師といふ元信も本朝に產れて何ぞ異邦の風骨と事とせんやと謂て漢畫を物乃数と若ぢ狩野本朝乃風格を建んとて先に於て和漢のあ所を分てり雪舟狩漢絵師と名ぢ事え信を本狩の絵師と称と所を言をもつて え信を本絵師と称ぜり去れふ因て自紹と狩野氏を流義乃無名ふ呼来まり曾て明國の鄭澤といふ畫者え信み書を寄て賣に狩野氏ら畫家の徴證なりといえり依て狩野家の眉目本朝乃英雄といふ屋し蓋し畫家の説ふ画に本と事とあれが故ふ筆勢の凡そ ざふを本絵と一如ざるふと事絵と名付とあり ふ事絵と其絵の去ふ似るは悪き故に去りといり絵きごを去に似あるを悪しといで川成が童れ面を写し多其人と為る宗者中の人を写して傳説を澤さる類豈いんせんや但生写といふを折乃言なるべ予嘗て師の教を学事あり其正ふ生るを物を能察目擊をべ一激拙乃出かといんどを生るを拙を

見ざるかを彼神の妙なる所為と事雅しそうなるものなれば
さはこものは古人の畫をうつしなる畫だにしなのまいい
で明り工に写し出すといへども筆格骨法を失ひ其詮色
故にすぐれて遠うれ畫ふ近うきとしいうり大抵其乃おとく寫し出
雅きき物を岩の屋出波の濤文なるべきもすれ動も其物を
ふ舍得し筆法とし為惑ぶれのこれあれ草木禽獸魚甲鱗
別撃法とし為惑ぶれのこれあれ草木禽獸魚甲鱗
乃類こを欲者く異なり万種の殊なるに依て宛も似ざれば物
を抱にあらば面霜の青に角ぐむ花木陽氣ふ向い萠出る
草花も時節の風を花葉に如くこ春の茅ハ竪に芽れ茅ハ
靡き秋を所為ふ疎黒む何きも筆勢れ云物に在て感真の

風情を調ひ是皆まるれ物を畫器に倣写を西湖なるずや
我乃代生抱に似ると非ともるハ一偏の碎論ふて未ざ畫法乃
一端をもわざるる児業れ言して論ともるに足ざるなり為こ上中下
三品れ論いふ所しなれ未とは定免雅し器を学ぶものを
畫家の道とよく弁へ知もる師ふ紙て其乃理を討論しる多
自ら思ひを尽し舍場乃期に及んで名を揚れ誉を擇ぶし
又世に男女のうつもき姿と器して大和絵といれどもきは
淳走絵といふものなり流の大和人物といハ土佐氏ご西乃
所をなるに源氏抱流の巻を写し出又古の奇仙絵を
或い昔物語乃仙人を図に新体を描ぐ紙しをなれを衣
被引まひあやれ市女笠ふ物り角袋乃物を

そ何ぞ人老羸相見れば俗又も農家れ不作賦山づの乃ひ
るむさ面多し今の浮世絵と比べれば古風質朴
にして筆勢亦奴妙なり又狩野氏が畫く源氏物語乃
宋常姿宮女の簡をけ多るさ面そ外我朝英雄武士
態土佐氏が絵り文を巻て賛を飾る其に和国乃人
物姿を畫し若を書勢を其外多和和歌絵山川
草木名類しなみ初る面し又西京に又歌を旅を絵
りて丹青の名あり丹青とは人物を絵ぐ絵いに
あらず本地理図を丹青といなり其背廣舜乃市
時四瀆の水溢れ天下に洪水漲り田畠を換じ穀
物を流し居り農業乃害深き故即ち禹王に

命じて美く天下の水道を正し洪水氾濫免しあ
なり河国の地理を畫をいえどもあり乃種陸乃衢
毎別ありて記が故に水乃流ゆく道條まは書絵異を多
穀を人の通路乃往還まは丹を絵異を用いのみ是を
丹青といなり元を地理を一面なり平なり或
境を分ち水陸の乃條紙写しなるなり又絵畫といも
あり絵を三面を見るを用あり大山小山の高低大河
小川池堤田畠其外樹木草原寺社人家なども要
く写は時を絵は形を文へ人面乃歌を用ゆる故り絵
畫ものなりたるく丹青は彩をなりにむり渡の沛
公秦を破り諸侯皆秦乃官庫に乱を入財多の

孫奚を奪い掠むけり蕭何という賢臣ひとり秦の
相府に入りて律令貨財に目も呉れず天下の地理器を入
し匣と懐み一身ばかり後蜀の桟道を張良が焼絶しを
見て蕭何と孫て外に道ある事を知れども法人のかと奪ん
為の謀略なり嘗て法良韓信を進ひる時韓信が云蜀乃
桟道絶て行乃ち行いでし家漢中へ入給しという時張良
懐中より小器弦出し陳蔡という道を教へ深中へ行し
ひるも蕭何が地理図を得し故なりあれひとえに丹青
乃徒なるべや

繪本直指寶卷之一目録

蚕家織婦之圖　蚕あり乃産業を妻しなを器を
唐子遊之圖
嬰児蛇行乃器　双六盤
彈琴図　囲碁の器
書畫を学ぶ器　騎楽の器
鶏合の器　競舟遊器

花車（くるま）付器（づき）

輦（てぐるま）乃器（づき）

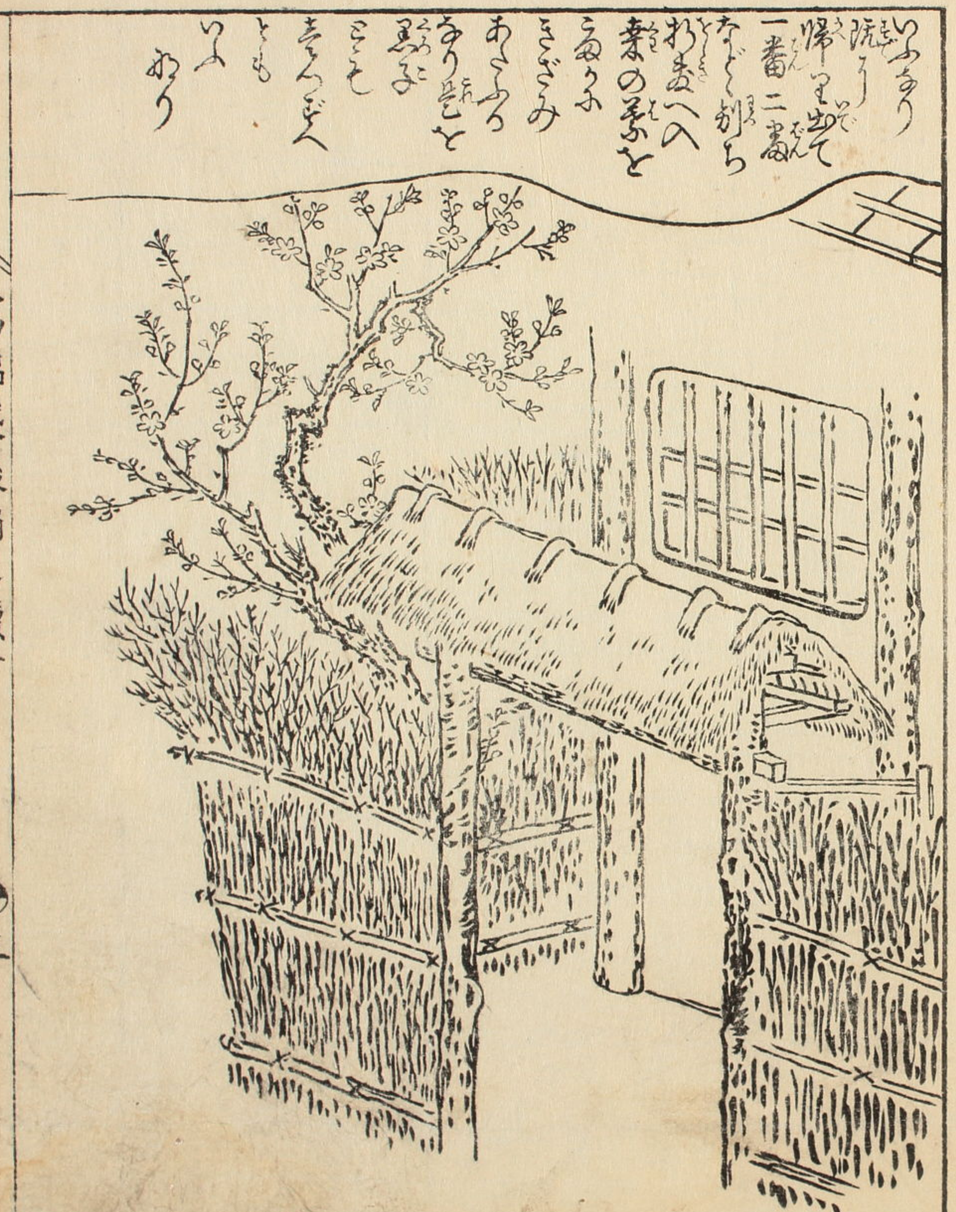
雪中（せちう）の遊（あそび）

耕織乃あのものゝ天下に通変ふ〜為男女幸若のよれるれうきとみち
穀を耕し女は蚕をして絹を製とされば織ものは服せず耕ものは
好んで食れといふ古言をゝもへばあらきゝ世方を換て手先年通変
志て略田家耕作の形容を図ととゝに蚕織乃器械酒せうよりて今変ふ
其首尾を器して蚕家の勤ゝ事業をきゝとるものも

蚕種乃紙より産付なるが表

三月中氣穀雨前後生れ出るとゝふと

ふゝり院乃帰て出て一番二番なゝ〜刈ちわ去へへ桑の葉を
ゐゐふきざみあさふるゆり葉と葉ふ
ふとも
きんぐんとも
いへり

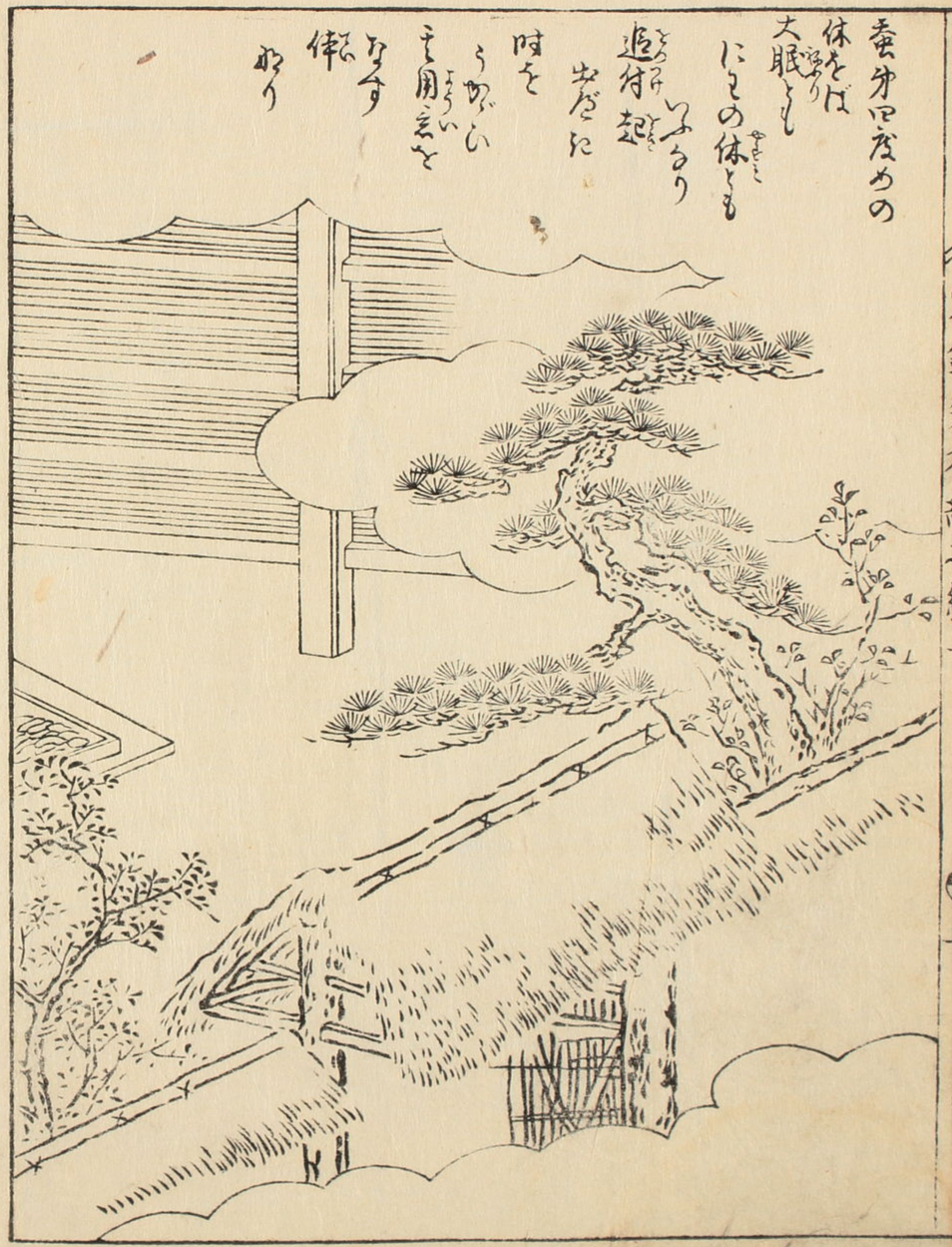


春はいとゝ
事さて葉と
あく食ねと
日度ごとを
眠ともよむ
元体ともいふ才二
度あれ体とる
体とも三度五度
たけりやとと
ともいふ才二度
元体をふるの
体ともいふとべて
体のはい葉紙
あくふるゆもの
加減ありと
いえ
ま

蚕三度の休乃後
桑を与へて
大きさになり
漸く多くなる
故に新の
竹篇を乃

ものよりて
桑乃葉を
刻み製るに
いとよし

蚕分日数の
休をば
大眠とし
にとの休とも
追付起
出だに
時を
うかゞい
主用を
なす
俗
なり



春もさぞに
大眠起して
後を桑の葉を
くろく車
前よりも
多さゆく
桑は葉ふと
採製
とるこう
いとなく
いそうして
待ちう

蚕まゆを
ゆりのけをとるとゝ
屋と蓋の新
桐はなをしのねとあ入く
ひさうしろ蚕を

蚕を
まゆを
まゆを紙をとり
翌日もして後まゆと
一つ
ひきとゝ
丸
まゆ紙
綾と

牡丹を石にして
紙り移し金い
咲くみを春分
これを
うつしし
よ

春風を吐絵り
塚乃
際に立て花
されを
春蝦と
なるう

生蘭を活ふ法を事あり
大きなる壺の四底より竹を筒を
入其上に初めの葉を敷
其上に蘭を
敷
次に
初めの葉を敷
上を
七日して
出
貧に入
獲に
ひ海
ろ
ろ
ろ

殺より糸をとり
色白く
いとぎよれと
細糸の
まゝとし
色黒きを
粗糸乃
まゝとす
真綿より
引く
上中
下を
拵と
なり
形を
作りて

真綿
煮て
把と
なり

蚕乃神を祭るの日本の古へを
考るに是ば軻遇突智山姫に並く
稚産霊を産出神の祖と奉し来
るとし神代巻に見へたり本朝にては
稚産昊と号る是紀のうみ甘二十二代
雄略天皇乃御后に初て養しなり
本日本紀に見へたり唐にては
黄帝の后西陵氏を始とするる
通説に出たり

唐子遊

曰素大全曰婦人の孕ると嬰と云婦人の胸に嬰と云物を附くまた婦人のふと懷に抱く衣の紐にて負に物を負るるようしろくて女の兒を嬰兒といつまろ赤にて紐其袖よりわき紐をぶらさげて胸にかけるなり

嬰童双六乃拍
子三朱三朱四朱五

唐の玄宗楊貴妃と
双六をあそびなしける
玄宗請目うり
いつくり
重四を
請く
汝朕が
頭をさし
入位よ
なさんと
のゝしり
半妃も
まさし
童こんを
請て
汝妻が
いつよ性をも
入位に
なさんと

狂して賽を盤よ
り出るにころ
賽筒の四をそこよ
破て三ころ
ころび出るにころ
されば入位を
紅衣を
入位の
下にこと四ふ
朱紙さう
をもとう
重三を四を
朱三
朱四
いつをなり

少女琴を弾

琴の曲数は一世古今に伝ちるとなつて数の名歌に合せ神仙と流と物あり絃若桑は始皇帝荊軻が為にはじめて流し害に及ぶ時始皇帝美人一曲の琴を弾じ給ふに琴の後もうしろ数ざん七人の屏風も跳りばなをとり越げんとろうれば美人名れば始皇帝ときうり荊軻がいのちを助ん衣の袖をゆりはつ七人乃屏風を始めとり越めくべき勢を逃れのがれ一曲の琴れ徒らり

小童囲碁
乃拍

九三面の
拍びち
敵味方に
言を泡
陣と対
して
拍こ戦い
勝負を争う
形容に
換え

唐土の小児八歳の時より小学校に入学初て孝弟を教十五歳に及んで大学校に入て
聖賢の道をまなび色々書はもとより天下の通貫なる書畫も
幸一体の物なり書い言を文字の上に形り四方万物の形をあらわす芸一白藝の
中にて一番使用廣大なる物なり丹青とは和漢画家の伝授ふ濃うかおし

小児騎楽の図

鬪鶏
乃
拾

湯陽彩舟

競舟とも云

紙園乃時楚忠に屈原と以賢臣あり五葉と云る佞臣屈原を精と恨みさゝ〳〵流云るにより江に投身流れ行ふ汨羅と身を投く死せり其為りとて競舟と飾て或い市子牧多系執をうりて競い流り

就魚と投ぐうり供物は湖水に投じとは今肥前ぜ海ふ毎年六月の日の中に舟と競い飾り漢の中をあゞ〳〵

是と快竜

とうり

ぞんにぜ海い

ろ〳〵ふりて

逆波をるゆ

日久しとつく

世日小到

也い居系

と為る

ちゝん今

身でホの

去世義式

を

みせり

小児
花車
乃拵

雪中乃柊

雪中に水を撒け水柱と凝
大雪降積之ゆ池と湖に
小児集り掴震ゑて
毬とおして是と
投し或いは獅の形を
作り楽しむ小児は気
勇ましく叫ぶ故に
百ゑ乃柊を圖
を新に雪中の
戯を
寸一
見

輦(てぐるま)
ひきそば

ナ木三ム
12
28